栞集を読む

松岡　隆子

おしろいを一夜かぎりの供花とせる　高野　達子

夕方咲いて朝は萎んでしまう白粉の花はおよそ供花には向かない。それでも敢えて咲いたばかりの白粉の花を仏前に供える。オシロイバナの咲く夕べ、何時までも遊んでいると「もうご飯ですよ」と母が呼びに来た子供の頃。夕明りの縁側にぽつねんと座って「きれいだねえ」とオシロイバナを眺めていた老いた母の姿。おしろいの花は母との思い出の花、「今年もオシロイバナが咲き出しましたよ」と語りかけながら静かに追憶の時を過ごしている高野さんの姿が思われる。

暮るるまで青田の先の湖の色　菊池　京子

水色の夕空は何時までも明るく、長い夏の日は暮れそうで暮れない。一望に拡がる植田もその先の湖もまだ青々としている。〈青田の先の湖の色〉とカメラ目線を湖に伸ばし湖の色に焦点を当てることによって、涼し気な夕景を描写して見せた。最小限に絞られた必要な言葉を十七音の調べに乗せて、大景を映像化している。表現の技はなかなかと思う。

秋風の吹くままにきて小石川　梶浦　道成

この句の眼目は〈小石川〉という地名。現在の東京都文京区小石川は、江戸時代は武蔵国豊島郡小石川村と言われた。伝通院の前の川に小石や砂が多かったことから小石川という名がついたとされる。今は小石川というと小石川後楽園、小石川植物園に繋がり、いずれも大勢の人々が訪れる名園である。特に俳人にとっては恰好の吟行地であり、梶浦さんも秋風が吹くと自ずと足が向くのである。「秋風の吹くままにきて」の次は「上野山」とか、「北の丸」、「神楽坂」などといろいろ言えるだろうが、やはり〈小石川〉が一番相応しい。作者の実体験から出来た句ゆえに素直に共感できる。

梵鐘の音の涼しさ琵琶湖まで　国盛　千春

おそらく三井の晩鐘であろう。あの安藤広重が描いた近江八景の三井の晩鐘を僅か十七音の俳句で表現していることに感動する。〈音の涼しさ琵琶湖まで〉という無駄のない省略の効いた措辞で、晩鐘の涼感をゆったりと詠い上げている。果てしなく拡がる近江の海の夕景はまさに広重の絵のごとし、であったことだろう。

萩散つて家売約の印三つ　山口　一女